魔法戦士リリカルなのは 1st　memory

黒衣の戦士

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

記憶をなくした少年はこの先に何を知り、何を見つけるのだろう

（一応ずれるときがありますが、一週間に一話投稿を予定しております）

目次

プロローグ ―― 1
少年の名前 ―― 5
朝の風景 ―― 9
転校生の宿命 ―― 13
下校 ―― 17
手に入れた魔法の力 ―― 23

プロローグ

雨が降り続いている中を目のハイライトが消えた一人の少年が傘もささずに歩き続けている。

「ここはどこだ?・・・僕は誰だ・・・」

と一言つぶやくと少年は再び歩き続ける。

そして、翠屋という店の前で少年は倒れる。

「くっ、体が重い・・・目・・・前が・・・らに・・・」

そこで少年の意識は闇に沈む。

すこしして店を閉めようと男性が店の中から出てきた。

男性は店の前で倒れている少年をみつけ声をかける。

「あのー、大丈夫ですか?」

「・・・・・・」

「どうやら気を失ってるみたいだな、見たところなのはと同い年くらいか、でもこのままじゃ風邪をひくし一応家に連れて行こう。」

男性は少年を抱えると店を閉め、家に帰った。

・・・二日後・・・

「うーーん・・・・」

少年が目を覚ますとそこは、普通の家の天井があり自分は布団に寝ていた。

「ここは?・・・えーと、たしか僕は倒れて・・・だめだ思い出せない。」

少年があれこれ議論していると、とある人物が部屋の中に入ってきた。

「おっ気がついたか、よかったよかった。」

「どこか、まだ具合の悪いところはない?」

と聞かれた。

「とりあえず大丈夫ですが、ここはどこですか?」

「ここは高町家、きみは俺が経営している、翠屋の前で倒れているのを見つけて家に連れてきたんだ。」

「そうなんですか・・・ありがとうございます。」

「君、ここに運ばれて2日間も眠りっぱなしで心配していたんだよ。」

「えっ!!・・・二日もここで眠ってたんですか?」

「ああ、もうぐっすりと」

「本当にすみません」

少年は申し訳なさそうに答えた

「そういえばまだ君の名前聞いてなかったよね。私は高町桃子。」
「俺は、高町士朗、君の倒れていた店のマスターをしている。君の名前は？」
「僕の名前は・・・ん？思い出せない」
　答えると同時に三人がいる部屋に女性が現れた。
「おとーさん、おかーさん朝ごはんできたよ・・・ってその子起きたの、はじめまして私は高町美由希っていいます、君の名前は？」
「えーと、僕は記憶喪失みたいで何もかも全く覚えて無いんです。」
「あ・・・そうなんだ」
　部屋にいる全員が暗くなる・・・士朗はなんとかひきつる笑顔で、
「じゃあ、記憶が戻るまで、ここで暮らす？」
　少年は驚いた、見ず知らずの自分を助けてもらい、しかも記憶が戻るまでここで暮らせるということに
「いいんですか？本当に迷惑かけるかもしれないし」
「私は別にいいわよ。」
「私もいいよ。」
　早くもＯＫと返事が来た。
「じゃあ、後はなのはと恭也に返事を聞くだけだな、一応二人に説明してくるから、一息

ついたら下の居間に来てくれるかな。」
少年は静かにうなずくと全員が部屋を出て行った。

少年の名前

どうやら、今日は日曜日らしい、朝の１０時気持ちの整理がつき少年は居間の扉を開けた。

「・・・・・・・・・・というわけなんだ。」

と聞こえたのでちょうど話が終えたところだった。

「俺は別にいいけど、なのははどうだ？」

「私もいいよ・・・もしこの家で暮らすとして、あの子はどこで寝泊まりするの？」

なのはは当たり前のような質問をする、この家はたいして他の家と変わらない、唯一違うとすれば家に道場があるということだ。

「まぁ、道場で寝泊まりできれば、十分だろ。」

ということになった。

扉を開けたまま固まっていたので扉を閉める音でようやく少年がいることに気ずいた。

「おっ、来たね、この二人がさっき言った恭也となのはだ。」

「はじめまして、高町恭也だ。」

「はじめまして、高町なのはです。みんな、なのはって呼ぶから君もなのはって呼んでね。」
　全員の自己紹介の済んだところで問題が起こった。
「この子、なんて呼べばいいの？」
　この少年は記憶を無くしているので名前もわからない、全員が悩んでいると少年は答える
「じゃあ、僕の名前は零でいいかな？」
「!!・・・自分で思いついたのか？」
「はい？・・・そうですけどおかしいですか？」
　不思議そうな顔で士朗に聞く。
「いや・・・この短時間で思いついたことに驚いてね、何かエピソードでもあるのかな？」
「えーと・・・記憶がないつまりゼロで他の読み方で漢字にできるのはこの読み方なので・・・この名前でいいかなって思っただけですが・・・。」
　そして少年の名前は零に決まった。
「とりあえず、記憶が戻るまでは零君も家族の一員なんだし名字は高町でいいよ、俺のことはお父さん、桃子のことはお母さんと呼んでくれ。」
　士朗の提案にさすがに零も少し驚いたがこれからのことを話すことにした。

「士朗さん、さすがに泊めてもらうだけでもありがたいのに、やっぱり家族の一員として過ごすなら、お店の方とか手伝ったりしたいんですけど・・・」
「・・・」
　零は提案してみるが士朗は答えない。
「父さん、・・・・」
　呼んでみると、士朗は
「たしかに、お店の前で広告を配っていたら、零の知っている人が声をかけてくれるかもしれないな、よし、じゃあ来週から働いてくれるかな?」
「ありがとう、父さん・・・って来週から!僕、平日の間、何をしていいんですか?。」
　零が士朗に聞く。
「平日はなのはと同じ学校の聖祥大付属小学校の同じクラスに行くことになったから。」
　士郎は聖祥大付属小学校のパンフレットを取り出しながら答える
「えええ!!そんなの聞いてませんよ。」
　その話を聞きなのはも、ふぇぇぇと言いながら驚いている。
「零君はほぼなのはと同い年なんだから、義務教育はちゃんと受けないとね。もう編入手続きはすんでるから、明日から学校頑張ってね。」
　零はパンフレットをめくりながら

「父さん、いきなり明日からって言われても、教科書もないし、しかも、なのはの通ってる、聖祥大付属小学校って制服ですが、どうやって通うんですか?」
　すると桃子は隣の部屋から箱を持ってきた。
「零君が寝てる間にいろいろ済ませておいたんだけど制服とかはやっぱり間に合わなくて、恭也のなんだけど一回着てくれる?」
　零は仕方なく制服を着てみるとサイズピッタリですごく似合っていた。
「制服はこれで大丈夫だな、教科書は明日、学校でもらえるから安心だな。」
　話が一段落し朝食を済ませ一息つくと
「とりあえず今日は土地勘を養うために、海鳴市周辺でも案内しますか。」
　と零は美由希に手を引っ張られでかけることになった。

朝の風景

昨日は美由希に連れられて土地勘を養うために海鳴市の周辺を回ることになった。
翠屋の場所や商店街など、家に帰ると零の歓迎会などいろいろなことがあった。
歓迎会の後、学校の行き方や先生のことなどなのはと話し結構、打ち解けていった。
次の日の朝・・・
「やっ、はっ・・・」
という掛け声が聞こえてきて零は目が覚めた。
扉をあけると美由希と恭也が剣道の練習試合をしていた。
「ごめん、起しちゃた?」
美由希は零に気づくとあやまった。
「大丈夫ですよ、丁度いいぐらいの時間に起きられましたし、そういえば毎日ここで剣道の練習してるんですか?」
「そうだよー、恭ちゃんは二日に一回ぐらいだけどね。」
美由希は恭也からタオルを受け取り汗を拭きながら答える。
しかし、零にはちょっと違和感があった。

「でもさっきの一戦ちょっとおかしくありませんでしたか？」
恭也は少し驚いた顔をして答えた。
「ああ、家に伝わる、父さん直伝の剣術なんだ。」
恭也の答えに美由希が付け加えるように
「でも、普通の剣道とあまりかわらないけどね。」
恭也があることを提案する。
「もしよかったら明日、朝練いっしょにやってみるか？」
美由希は最初から思っていたのか即答する。
「私は別にいいし、家の剣術と普通の剣道の違いが見分けれるなんて珍しいしもしかしたら、記憶を無くす前、剣道やっていたのかもしれないし、やってみたら記憶を思い出すヒントになるかもね。」
「じゃあとりあえず、明日だけやって続けられそうだったらずっとやっていきます。」
零は剣道をやっていた二人がとてもかっこいいと思った。
・・・数十分後
身支度を済ませ剣道を見学していた零たちを制服姿のなのはが呼びに来た。
「おねーちゃーん、おにーちゃーん、零君、朝ごはんだよ。」
恭也はおはよう、なのは、と短く答え、美由希もおはようと答えた後、なのはにあた

らしいタオルをうけとった。
「おはようございます。なのは。」
なのはは、笑いながら、
「普通に言ってよ零君。」
零は笑いながら
「おはよう、なのは。」
とこたえると、なのはは、
「おはよう、零君。」
朝の挨拶を済ませた後、四人は居間に向かった。
居間では士朗が、新聞を読みながらコーヒーを飲んでいた。
四人が部屋に入ると士朗と桃子が
「おはよう、零君。」
と零だけに言った、もう三人は挨拶してるのかと思い零は、
「おはよう、父さん、母さん」
慣れたのかそうよんだ。
全員席に着くと
「いただきます。」

と言って食べ始めた。
食べている間、士朗と桃子がイチャついていて、驚いたがなのはが
「いつもの光景だから気にしなくていいの。」
と言ったので気にせず朝食を食べ終えた。
零は道場からカバンをとってくるとなのはが門の前で待っていて、士朗と桃子も玄関にいた、零となのはは同時に
「「いってきます。」」
と言って出発した。

転校生の宿命

聖祥大付属小学校は海の近くにある学校で、少し距離があるのでバスで登校することになり、なのはと一緒にバスに乗った。

バスの一番後ろの席になのはの友達の月村すずかとアリサ・バニングスが座っていてなのははその真ん中に座って話を始めた。

零はあいている席に座って空を眺めていた。

すずかは心配そうな顔でなのはに聞いた。

「今日、なのはちゃんと一緒に乗ってきた男の子ってだれ?」

「もしかして、なのはにつきまとってるストーカーじゃないでしょうね」

アリサは怒りオーラを全開にしてなのはに聞く。

そのオーラに近くの男子は少し震えている、零も背筋に悪寒が走った。

なのははにゃははと笑いながらアリサの怒りをしずめるために答える。

「大丈夫、今日は一緒だっただけなの。」

「まぁいいわ、なのはが大丈夫っていうなら大丈夫よね。」

アリサの怒りオーラが少し弱まる。

「で、なのはちゃんあの子の名前知ってるの？」
すずかが余計な質問をした。
「学校につくとわかるから。」
と一言答えると、強引に話の流れを昨日のテレビの話にした。
数十分後・・・
学校に到着しバスをおりた零は一度、伸びをし深呼吸をしあいさつのため職員室を探しに校内に入った。
数分後・・・
「うーむ・・・すっかり迷子だ、職員室どこだろう・・・。」
零は校内で迷子になっていた。
すると前から先生らしき女性がいたので職員室の場所を聞くことにした。
「すいません、今日、転校してきた、高町零なんですが、職員室ってどこにあるんですか。」
先生はあーこの子かという顔をしながら答えた。
「私はあなたの担任の鈴本結衣です。職員室に行くのはいいけどもう時間がないよ。」
零は若干、驚きながら
「えーと、職員室に行こうと思ったのは担任の先生にあいさつに行こうと思ったからなんですが行く必要がなくなりましたね、今日からよろしくお願いします。」

あいさつがすんだ瞬間チャイムが鳴ったので零は案内されるように教室に行った。
先生が教室に入ると、零は少し廊下で待っていた、教室の中であいさつが聞こえた後、当たり前のように、
「今日から、このクラスに新しい人が一人増えまーす、みんな仲良くしてあげてくださいね。」
と言うと同時に生徒から「男女どっち」、という質問が来たので、普通に
「男の子でーす。・・・では、転校生君入ってきてください。」
零は緊張しながら一礼して教室に入った、すずかは、
「っあ、あの子ってバスになのはちゃんと一緒に乗ってきた。」
と小さな声で呟く。
零は一礼し自己紹介を始める。
「はじめまして、高町零です、えーと僕はいろいろあって今、高町さんの家でくらしています。これからみんなと仲良くしていけたらいいと思っています。よろしくお願いします。」
自己紹介が終わり、拍手が終わると先生が、
「じゃあ、零君はなのはさんの横が空いてわね、そこに座ってください。」
と言われ、席に座ると同時に、チャイムが鳴り、朝のＨＲが終わった。

先生が教室から出るとクラス全員が零の周りに集まった。
「ねぇねぇ、零君ってどうして高町さんの家で暮らしてるの？」
「趣味とか好きなものは？」
「得意教科は何？」
などの無限の質問地獄になった。

下校

一日の休憩時間をすべて質問に使われヘトヘトになったが、なんとか無事に終わりのHRをむかえた。
「では、零君は帰りに職員室に寄ってください。・・・ではみなさんさようなら。」
あいさつを終え生徒の大半が教室の外へ出た後、伸びをしているとなのはが話しかけてきた。
「にゃははは、大変だったね零君。」
「まったくですよ、本当につかれました。」
なのはが零と話していると、すずかとアリサが寄ってきた。
「なのは、今日、塾あるけどこれからどうする?」
アリサがなのはに聞く。
「うーん、塾まで時間まだあるし、零君に町でも案内してあげようよ。」
すずかはなのはに提案する。
「えっと、昨日美由希さんといろいろ町案内されたんだけど。」
零は答えると、なのはは言う、

「じゃあ、今日夢に出た公園に行こうよ。」
　なのはの提案に零とすずかとアリサは
「「どうして？」」
「えっと・・・結構、繊細な夢だったし塾の近道だし、塾行く前に零君を翠屋に案内してあげれるから・・・」
　アリサとすずかと相談していた
「私は別にいいけど」
「すずかが行くなら私もいく」
　アリサとすずかは決まった。
「（まぁ昨日一日じゃちょっと曖昧ですしね）僕もいいですよ。」
　零は返事をした後、職員室に行き教科書をもらい、なのはたちと合流し公園に向かって歩き始める
　・・・数十分後・・・
　数十冊の教科書を持っている零は、全く疲れて無い様子でなのは達と話しながら公園の中を歩いていた。
「よく、そんな重たいものずっと持って疲れないわねー。」
　アリサは少し感心しながら零に話しかける。

「ちょっと、重たいけど疲れるってほどじゃないですし、学校の質問攻めに比べたら楽な方ですよ。」
なのは達はその答えに同時に苦笑いし、アリサは近道を見つけて少し走る。
「あっ、こっちこっち、ちょっと道悪いけど近道なんだよね。」
アリサは自慢するように答える。
四人はその道を歩いていると、
『助けて・・・』
という声が聞こえてなのはと零は振り向く。
「どうしたの、なのはちゃん、零君?」
すずかは心配な顔で二人に聞く
「今、何か聞こえなかった（か）？」
なのはと零はすずかとアリサに聞く。
「・・・私は聞こえなかったわよ。」
「私も・・・」
二人が答えるとまた
『助けて・・・』
とこんどは、はっきり聞こえ、なのはと零はその方向に走って行くと傷ついたフェ

レットが倒れていた。
「どっ、どうしよう。」
なのはは三人に聞く。
「どうしようって、とりあえず病院？」
「「獣医さんだよ。」」
零とすずかは同時に答える。
「この近くに獣医さんってあったっけ？」
なのはは三人に聞く。
零は、まだ完璧に海鳴の町を知っているわけではないので、あたりを見ている
「ん？なんだこれ？」
ヒモの付いた赤い宝石と剣の形の飾りのついたネックレスを見つけて拾う。
「とりあえず、家に電話してみる。」
なのは達の方もすずかが家に電話することで片付いたようだ。
・・・約三十分後・・・
とりあえず四人はすずかの呼んだ車で槇原動物病院にフェレットを連れていった。
治療が終わり、心配しそうにしているなのは達に言う。
「けがはそんなに深くないし、命に別条はないわ。」

そう聞くとなのは達は安心したような顔になる。
「「「院長先生、ありがとうございます。」」」
と四人同時に答えた。
「これって、フェレットですよね、どこかのペットなんでしょうか?」
アリサは院長に聞く。
院長は困った顔をして
「フェレットなのかなぁ?ずいぶん変わった種類だけど・・・。」
零は心の中で、
『おいおい、獣医さんがそんなんでいいのか』
と少し思っているとポケットの中に入れていた、赤い宝石と剣の形をしたネックレスを取り出す。
なのはは聞く
「零君、それどうしたの?」
「えっ、そのフェレットの倒れてた近くに落ちてたんですよ。」
と答え終わるとフェレットが目を覚ました。
フェレットは不思議そうな顔であたりを見回すと、なのはの方を見つめる。
なのははそっと手を近付けるとフェレットはペロッとなのはの指をなめ、また気絶し

た。
「しばらく安静にした方が良さそうだから、明日まで預かっておこうか?」
　と院長は聞くと、四人は
「「「はい、お願いします。」」」
　と答える。
「そういえば三人とも塾がありましたよね。」
　零は三人に聞くと
「あっやば、塾の時間!!」
　なのは達は院長先生にお礼を言いながら塾へ走って行った。
　零を残して・・・
「僕、どうすればいいんでしょう・・・」
　はー、とため息をつき院長さんに地図を借りてとりあえず翠屋に行くことにした。

手に入れた魔法の力

なのは達が塾に行ったあと、零は一人地図を見ながら翠屋を目指していた。
「まったく、せめて合流場所ぐらい決めてくれればいいのに。」
とため息交じりに独り言を言っていた。
・・・数分後・・・
「やっと・・・ついた。」
零は翠屋に無事辿り着いた。
翠屋の扉をあけると、客は一人もいずカランコロンという音が響き店の奥から士朗が出てきた。
「おかえり、零君・・・あれ、なのはは?」
「はー・・・僕をほって塾に行きましたよ。」
零は士朗が出してくれたアイスティーを飲みながら答えた。
「じゃあ、これかたずけたら閉店時間だから家に帰ろうか。」
士朗が立ち上がると同時に零はアイスティーを飲みほし厨房で洗い物をしている士朗にコップ渡し外に立てている看板をかたずけた。

「ありがとう、零君じゃあ帰ろうか。」
　士朗は翠屋のシャッターを下ろすと歩き始めた。
「零君、どうだい学校の方は。」
「うーん・・・まだ一日目でよく分からないけど、今日の質問攻めは疲れましたね。」
　零は笑いながら答えると士朗も少し笑った。
　家に着いてリビングでテレビを見ているとなのはが帰ってきた。
「「「「おかえり、なのは」」」」
　なぜか五人共同時に返事し笑いが生まれた。
　笑いがおさまるとなのはは
「ごめん、零君、塾に急いでたからおいてちゃて・・・」
　なのはは申し訳なさそうに言う。
「大丈夫、ちゃんと帰ってこれたし、でも次からは注意してよ。」
　と笑いながらなのはの頭をなでた。
　・・・その後、夕飯を食べ、寝る準備をした後、零は寝るために干しておいた布団を引いていると玄関が開く音がした。
「ん?・・・こんな時間にだれか出かけるのか。」
　零は玄関の方を見ると、私服姿であたりをみまわしながらなのはが外出しようとして

いた、不審に思った零は気付かれないように後を追いかけた
零がなのはを追いかけると昼間の動物病院に着くと、近くで何かが壁に突っ込んでおり、横にフェレットを抱えたなのはがいた。
「なのは!!勝手に出かけたことはいいとしてあれなんだよ?」
フェレットを抱えた、なのはに聞く。
「わかんないけど、また昼間みたいな声がしてここに来たらこんなことに・・・」
零となのはは目の前にいるものが何か考えていると、
「あれは、ジュエルシードが反応して作り出してしまった化物です」
と聞きなれない声がした。
なのは達が声の主を探すと、フェレットが話しかけてきた
「「しゃべった!!」」
なのはと零は少し驚いたがすぐに落ち着きとりあえず動物病院を離れた。
なのはがフェレットを抱えながらフェレットは話し続ける
「君たちには素質（そしつ）がある・・・だからお願い少しだけ力をかしてくれませんか?」
零となのはは頭に?マークを浮かべながら
「「素質?」」

フェレットは構わず続ける
「僕は、ある探し物のためにここではない世界から来ました。でも僕一人の力では思いを遂げられないかもしれない。だから迷惑だとわかっていても素質を持っている人に手伝ってもらおうと・・・お礼します必ずします、だから君たちに僕の持っている力、魔法の力を使ってくれませんか。」
零となのははまだ？マークを浮かべたままで
「「魔法？」」
零は何言ってんのこのフェレットはと思っていた。
しかしこの空気を破壊するようにさっきの化物が突っ込んできた。
零となのははとっさにかわし話が続けられる
「お礼は必ずしますから・・・」
零は呆れたように
「今は、お礼とかそんな場合じゃないだろ」
と少し怒りながら言う。
「どうすれば、いいんだよ。」
フェレットに聞くと、フェレットは赤い宝石と剣の飾りのついたネックレスを零となのはに渡す。

「これを手に目を閉じて心をすまして、僕の言うとうり繰り返して・・・いくよ!!」
　二人はこくりとうなずく。
「我、使命をうけし者のなり」
「「我、使命をうけし者のなり」」
「契約の元、その力を解き放て」
「「契約の元、その力を解き放て」」
「風は空に、星は天に」
「「風は空に、星は天に」」
「そして、不屈の心は、この胸に」
「「そして、不屈の心は、この胸に」」
「「この手に魔法を」」
「レイジングハート」
「セイクリッド・スター」
「「セットアップ」」
「スタンバイ　レディ　セット　アップ」
　となのはの方からは機械の女性のような音声が
「スタンバイ　レディ　セットアップ」

と零の方からは女の子みたいな声が発せられ、赤い宝石と剣のネックレスは輝きだした。